

第 38 回 Kyoto 演劇フェスティバル

グループ 空 清 『天守物語』

講評者 大原めい

舞台奥に黒い屏風、両横に赤い柱が立っている。下手側には畳が敷かれ、手鞠がそのへりに二つ置かれている。上手側には毒々しい色の花が活けられ、舞台をあやしく彩る。

摩訶不思議な「天守物語」の世界へ観客を誘いたいという思いを感じました。

戯曲を読んで表現することを「ドラマリーディング」といいますが、空清さんの舞台はドラマリーディングへの初めての挑戦だったのでしょうか。

舞台の形式は昨年とほぼ同じ(衣装を除いて)に見えましたが、全く世界観の違う作品ですので、新しい手法を模索してもよかったのではないのでしょうか。(毎年、観る人もいます)

今回は読み手が登場人物の「夫人」を意識した衣装や髪形で登場したのはどういう思いだったのでしょうか。意図的にそうしたのなら、その意味が見たかったし、そうでないのなら、一人で朗読するのですから、読み手は何者にも変わりうる姿の方がいいのではないのでしょうか。衣装が邪魔をしているところがあったと感じます。

朗読者の声は美しく明晰で、今年の「輪違屋 糸里」の際にも感じましたが、独自の雰囲気を持っておられると思います。

難解だといわれる泉鏡花の「天守物語」に空清のみなさんが挑戦し、それを読みこみ、理解していく過程は 難しくても楽しい時間だったと想像できます。

しかし、「天守物語」はそう簡単に料理できる作品ではないと改めて思いました。

言葉の面をとっても、観客は文字を見ているのではなく、耳だけで聴くのですから、より行動的に読んでいかないと、その世界は見えてこないのです。すべての言葉を克明に理解できなくてもいいとは思いますが、今の朗読では心の動きが雰囲気に流れてしまって、登場人物の思いや物語の背骨が見えてこないと感じます。

今年の「…糸里」は、舞台は島原で、現代語で書かれていますので、そんなに苦労はないと思いますが、戯曲「天守物語」の不思議な世界を創りあげ、登場人物の心情を伝えるためには、古典の言葉を語る力と、人物をしっかりした描写する力が必要です。

登場人物の思いを雰囲気ではなく語ってほしいのです。心情を文章でなく、会話だけで物語る戯曲にはそれがより求められます。

いろいろな形のドラマリーディングがあってもいいとは思いますが、一人で読み切る形にするのなら、表現がパターンに陥らないように、新しい発想で深めていってください。空清の魅力的な語りをより磨き、次の段階にステップされることを期待しています。そして、新しい作品への挑戦を楽しみにしています。